

p26・労働力の価値は、平均労働者の習慣的に必要とする生活手段の価値によって規定
 生活手段の総量は、一定の社会の一定の時代には、不変の大きさとして取り扱われる。
 変動するのはこの量の価値である。

- ・(今回は検討外の2要因)①生産様式と共に変化する労働力の育成費
 ②男子か女子か、成年か未成年か、という労働力の自然的相違。
- ・前提(想定)=(1)商品はその価値どおりに売られる。
 (2)労働力の価格は価値以上にのぼることはあっても決して価値以下には低下しない。
- ・労働力の価値と剰余価値との相対的な大きさの制約要因。
 ①労働日の長さ ②労働の標準的強度 ③労働の生産力

※(概念整理)労働日の生産物は
 C 資本= c 不変資本(生産手段)+ v 可変資本(労働力の価値)+ m 剰余価値
 前提:必要労働時間6時間・3シリング、剰余労働時間5時間・3シリング

p27-第1節、労働日の大きさと労働の強度とが不変で、労働の生産力が可変である場合

- ・労働力の価値と剰余価値は、三つの法則によって規定される。
- ①第一に、労働日の大きさは、同じ価値生産物で表される。=1労働日=6シリング=○量
 生産物=▽量生産物
- ②p28 労働力の価値と剰余価値とは、互いに反対の方向に変動する。
 ・p29 リカードの間違い(見落とし)… v と m は割合の変化でなく量の変化をもたらす。
- ③p30 剰余価値の増減は、労働力の価値の増減の結果であって原因ではない。
 ・p32 労働力の価格は、労働生産力が高まれば、生活手段量が増大しつつも、下落することがありうる。
 ・(これは)剰余価値と比較すれば、労働力の価値は絶えず低落し、労働者の生活状態と資本家との隔たりは拡大される。
 ・リカードの混同(利潤率と剰余価値率)
 剰余価値率= $m/v=100p/100p=100\%$ 利潤率= $m/C=100p/500p=20\%$

p33-第2節、労働日と労働の生産力とが不変で、労働の強度が可変である場合

- p33-34・労働の強度は、同じ時間内で労働支出が増加する。強い労働=より多くの生産物。
 生産物の価値は変わらない。数が増加する。
- ・(生産力)高められることにより、より多くの生産物。しかし価値は低下。
 - ・強度の強い12H労働(6s→7s)。労働力の価格上昇は、その価値の低落を伴うこともある。

p36-第3節、労働の生産力と強度とが不変で労働日が可変である場合

- ①労働日の短縮
- ・労働の生産力と強度を不変→労働力の価値・必要労働時間を変化させない→剰余価値を縮小させる→労働力の価格を縮小させて「損害を避ける」

②労働日の延長

・必要労働時間 6 時間・3 シリング、剰余労働時間 6 時間・3 シリングとする。

p37・剰余価値を増大させる。労働力の価値量は不変なのに減少させられる。

・労働力の日価値は…労働者の標準的生存時間に基づいて…評価される。

・労働力の消耗の増大は、ある点までは「代償の増加」によって補償されるが、この点を超えれば、消耗は幾何級数的に増大し、正常な再生産条件と活動条件が破壊される。

p38-第 4 節、労働の持続、生産力、強度が、同時に変化する場合

・多数の組み合わせが可能だが、ここでは二つの重要な場合のみ。

(1)労働の生産力が低下して、同時に労働日が延長される場合

・土地の不毛度の増大→労働生産力の低下→生産物の騰貴。

→労働時間を延長→※延長時間によって

12 時間(6+6) = 量は変わらず。必要労働時間が増加し(+2=8)、剰余労働時間は減少(4)。

14 時間(6+8) = 必要労働時間が増加し(+2=8)、剰余労働時間は変わらず(6)、しかし比率は減少。

16 時間(8+8) = 比率は変わらないが、剰余価値 $3s \rightarrow 4s$ 、 $1/3$ 増大する。

・延長の程度によって、両方とも増大することがありうる。

p39・1799 年-1815 年期間…生活手段の価格騰貴は、労賃が低落したのに名目的賃金騰貴。

リカードは、「剰余価値率の低下を惹起」と幻想したが、当時は高められた労働強度と労働時間延長で「剰余価値は絶対的にも相対的にも増大した」

p41-(2)労働の強度と生産力が増加し、同時に労働日が短縮される場合。

・両者ともに、生産物量を増加させ、その生産に要する労働日部分を短縮する。

・労働日の絶対的な最小限界まで縮小すれば、剰余労働は消滅する。しかしそれは資本の支配下では不可能なことである。

・資本主義的生産形態の廃止は、労働日を必要労働だけに制限することを許すが、…。

現在の剰余労働の一部が必要労働(すなわち社会的準備・蓄積原本の獲得に必要な労働)に数えられるであろう。

p42・労働の強度と生産力が与えられたものであるなら…

①すべての労働能力ある社会成員のあいだに労働が均等に分配されているほど…

②労働の自然必然性を一社会層が自己自身から他の層へ転化しうることが少なければ少ないほど…

③社会労働日のうちの物質的生産に必要な部分は短くなり、個人の自由な精神および社会的活動のために獲得される時間的部分は大きくなる。

・労働日の短縮に対する絶対的な限界は、労働の普遍性である。

資本主義社会では、一階級にとっての自由な時間は、大衆の全生活時間を労働時間に転化させることによって産み出されるのである。